

現象としての感情

—愛と憎の原動力—

Emotion in Life

— Power of Love and Hate —

福 田 正 治

はじめに

人を好きになったとき、どうしてこのようなやるせない気持ちになるのか、ふと立ち止まって考える瞬間がある。そして彼の、彼女の何に好きになったか考えてみると、容姿が良かったから、性格が良かったから、面白い人であったからとそれぞれに理由は異なっているだろうが、一応それを見つけて、だから好きだと納得しているところがある。それで性格のどこがどうして好きになったかを問われると、好きだから仕方がないじゃないといって逃げられてしまう。そのような気持ちがどうして自分の中に出てきたかを深く追求しようとするとう説明に苦しむところがある。

昔の人は感情イコールこころ（心）と考えて、心が心臓にあると考えていた。人を好きになると胸元がキュッと痛むし、彼の、彼女のことを思い浮かべると心臓がドキドキする。そのことから多分自分の心臓辺りにその源があるのだろうと考えてきたのだろう。日本語の心臓はこころの臓と書く。

感情がどうして出てくるかという疑問に対して、二つの視点が考えられる。一つはその感情が出てくるメカニズムであり、人を好きになったときの、愛しいという気持ちがどのような生物学的なメカニズムでわれわれの意識に上ってくるかという疑問である。確かにその感情を感じている自分がいて、実際に経験している自分がいる。また確かに自分という者だけの感情ではあるが、他の者もまた同様な感情を体験しているだろうと信じるだけの確信はある。ということはそこに科学的な因果関係があるはずであると考えるのは当然なことである。好きになったことに対して、興ざめなことであるが、人を好きになることは、われわれ生物の本能である種族維持の性質からくる特性で、生物が持っている基本的な性質であると説明されることが多い⁽¹⁾。

現代の生物学では、動物の行動を説明する場合、しばしば本能という言葉を用いる。動物の生命を維持することは生物としての本性であるとか、その種が存続するためには性行動は必要不可

欠なものであると。われわれはそのような説明で本当に納得しているのでしょうか。何か実感できないものが残る。本能とか欲求という言葉を用いる段階で、原因の追究を止めて思考停止状態に陥ってしまっているような気がする。それから先の議論をどう展開すればよいのか、実際の生活の中でどう応用していけばよいのか皆目わからないでいる。ある種の人そこから先に万物の創造主である神を見ることになり、神が本能や欲求を人間に与えたと考える⁽²⁾。また別の人は、人の設計図である遺伝子に注目し、感情の遺伝子で説明されるのではないかと期待している⁽³⁾。しかし今のところ遺伝子に感情の影を見ることはなかなか難しい。

第二の視点はその感情が発生する関係性を議論し明らかにすることである⁽⁴⁾。つまりその感情が起こる現象に注目し、例えば好きになることに対して、どのような場合に好きという感情が起こるのか、またどのような人とのつながりの中で生じるかを明らかにすることである。心理学はこの視点に立って多くのデータが集められてきており、比較的攻略可能な戦略であると考えられる⁽⁵⁾。われわれはこのような知識から、今自分がどうして彼を、彼女を好きになったのかを理解し、納得し、自分は異常でない正常な感情の振る舞いを行っていると思えるところがある。愛する者の対象や恋愛行動の種類は現代社会では多種多様に広がり何でも認められてくるような社会になりつつあるが、それがどうして許されるのか、その関係性の根拠を感情学の中に見つけたいと考える人も多いのではないと思う。

感情を考えるにあたって、感情を動物にも存在する情動と人間だけが持っている感情とに区別してわれわれは議論してきた⁽⁶⁾。そしてその情動がどのような生物学的根拠から発生してくるのかについて考察した。この論点は上で述べた第一の視点に相当している。しかし今日の日本ではほとんどの人の衣食住が満たされ、原始時代から中世にかけてのような生存にかかわるような飢餓に襲われているわけでもなく、アラブ世界のように身体に危害が直接加えられるような明日の命も分からない場所に住んでいることもなく、それなりの安心できる生活を送っている社会である。また動物のように闘争か逃避という時代でもない。このことはわれわれが動物にも存在する情動のレベルでの感情をもって生活を送っているわけではないことを意味している。むしろ現代は直接的な敵は見え、基本的な利害は身分、地位、自負心、プライド、面子、尊厳、財産などにかかわっている。そして人間関係の複雑さを反映したストレスに曝された社会の中で、まさしくあらゆる感情に蝕まれている社会である。そこには動物にない複雑で多種多様な感情の発露がある。したがって基本情動や原始情動に複雑化した社会の感情の起源を求めても説明責任を果たしていないのではないかと危惧を感じる。

本論ではヒトが持つこのような多種多様な感情の成因について考察を試みようとしているが、感情はとても単純に分類できるものではないし、それぞれの感情が相互に非常に複雑に絡み合っている。別著で情動・感情の分類を試みたが、動物にも存在する情動のレベルで止まってしまった⁽⁶⁾。ヒトの感情の分類となると、そもそも感情なるものを言葉で表しえるのかという大きな疑問があり、感情を表すのに未だ言葉が足りないのではないかと不安を持つ。これは恐らく無

意識の部分を含んでいるために未だに全体像を明らかにしていないためであると考えられる。そのような問題が感情について議論する場合横たわっているが、ここでは極限られた感情、それも人間にとっては根本的な感情であると考えられる愛と憎を中心に議論する。これは恐らく誰にとっても、生きていく上で避けることのできない感情であり、これを経験していない人はいないのである。またこれは人間に活力と不安を与えると同時に、未来に希望と絶望を与えるものと考えられ、過去に多くの先人がこのことについて智慧をめぐらし、膨大な智慧がわれわれの前に横たわっているからである。

その他の感情、涙⁽⁷⁾、笑い⁽⁸⁾、神⁽⁹⁾、美⁽¹⁰⁾、共感⁽¹¹⁾、恐怖⁽¹²⁾、悪⁽¹³⁾などについては優れた解説書が多く出版されている。

1. 愛の起源

情動としての愛情は生物が子孫を残す上で必要不可欠な機能として考えられ、生殖および養育からその発生が説明されてきた。現代社会でいえば、家族、家庭というものが有史以来連綿と続いてきていることを考えると、理解できる理由の一つである。しかし文明の発生は、人間関係を大きく変容させてきた。原始時代の世界人口はたかだか数百万人程度で、自分の集団以外に人間を見つけるのが困難であったに違いない。そんな時、適齢の男性、女性を見つけるのもまた非常に困難であり、恐らく一部分は略奪的に行われていたであろう。それに加えて原始時代の平均寿命は非常に短かった。そのような環境では子孫を残すための補助機能としての感情はまさしく情動のレベルであったと考えられる。いつのときからか、地球温暖化の過程で生産力が向上し人口も増加してくると、人間関係や男女関係も変ってこざるを得なかった⁽¹⁹⁾。平均寿命も延び、一ヶ所に定住するようになってくると、ここに感情としての愛の複雑さの芽生えが出てきた。例えば、短い人生では、愛や喜びは無視されても耐えていけただろうが、寿命が延びると、長い人生での愛や喜びを大切にするようになったとも考えられる。

1. 1 愛という言葉

愛や愛情を議論し、歴史に参考を求める場合、2000年前の愛と現在の愛との意味は異なるし、日本と西洋での意味も異なっているために、言葉の意味の変遷、文化の違いなど多くの点に注意を払って考えなければならない。

日本において「愛」という言葉は当然のことながら中国から伝わってきた。その当時の言葉が意味するところは、心がせつなく詰まって足もそぞろに進まないさまを表すことから、心意の定まらぬおぼろげな状態という言葉であった。そこからいとおしむ、めでるの意味を持ってくる^(14,15)。日本では気持ちを表現する言葉として、古来、かはいがる、いつくしむ、思ふ、恋ふ、しのばゆ、睦む、親しむ、慕うなどが使用されていた⁽²¹⁾。万葉集を紐解くと、そこに多くの相聞歌を見つけることができる⁽¹⁶⁾。

日本の思想の原型を作った仏教では、愛を煩惱の一種として遠ざける傾向にあったが、慈悲と

いう言葉の中に現代で言うところの愛の意味が含まれている。慈悲はいつくしみ、あわれみといった意味で人間の愛憎を超えた感情である⁽¹⁷⁾。

われわれが現在使っている愛や愛情、恋愛は明治時代、英語の Love, Amour, 独逸語の Liebe の訳として本格的に用いられた⁽¹⁶⁾。当時これらの訳語は江戸時代の身分制度に縛られていた人間関係から、自由な人間関係を象徴する言葉として知識人を中心に広く用いられた。この新たな言葉に多くの人々は明治の文明開化を実感したに違いない。しかし愛という言葉は残念ながら原語に含まれるいろいろな違いを表すことなく、恋、恋愛、性愛、不倫による愛など区別することなく用いられてきたがために、愛が意味するところは人によって大きく分かれてくることになった。人によっては愛や恋愛という言葉の中に恥ずかしさ、不純さを感じることもなった。

1. 2 愛の変遷

西洋における愛はギリシア時代にさかのぼって議論されてきた。プラトンは愛をエロス (eros), アガペー (agape) に分けて考えた⁽¹⁸⁾。エロスは善なるものへの所有する情熱で、プラトンは善なるものを達成することが生きることの目標であることを唱えた中での概念であった。その中には、女性は愛の対象ではなく、同性愛が愛の対象であった。アガペーは神から地上の人間に対する愛である。アリストテレスはそれらに加えて、フィリア (philia), 友愛を加えた⁽¹⁸⁾。今日でいう愛は、その時代、むしろ非理性的でよりよく生きていくのを妨げるものとして避けられていた。したがって、その時代の感情の分類には愛が含まれず、基本的情念として喜び、怒り、悲しみ、欲望がスコラ哲学の中で指摘されていただけである⁽¹⁸⁾。当然のことながら、旧約聖書のモーゼの十戒にも愛という言葉は出てこない⁽¹⁹⁾。

ついでキリスト教が勃興してくる。イエスは神の愛、そして隣人愛を唱える⁽²⁰⁾。キリスト教における愛について論じる力はこの時代ではないが、どうも愛の中に現代で言うところの夫婦愛、男女間の愛はあまり含んでいないようである。聖職者はアガペーを強調し、執拗にエロス (性) にまつわる人間の心の動きを制限し、忌み嫌うように大衆を教唆していった事実がある⁽²¹⁾。

愛が感情の中に入れられるのは、デカルトがまとめた情念論の中である⁽²²⁾。デカルトは感情を、驚き、愛、喜び、憎しみ、悲しみ、欲望の6種類とした。スコラ哲学と比べて新たに驚きと愛を感情の中に加えたことになる。デカルトの愛の定義は自ら適合していると思われる対象に自分の意志で結合させるものと考えている。その愛の中心課題は神の愛でありキリスト教1600年にわたる愛の概念を情念として無視できなかったことによる。男女の愛は微妙な問題を含んでいたのか、または複雑すぎたのか議論の対象とはしていなかった⁽²³⁾。しかし彼の情念論はエロスとしての愛を議論するきっかけになったことは確かであろう。

一方、男女間の愛の原型は12世紀頃の中世の宮廷の中から出てきたといわれている。男女の性愛が一つの理想形として捉えられる芽生えがここに育ってきたが、その愛は結婚とは結びつかず、他人の妻に理想の愛の姿を求めることもあった⁽²⁴⁾。

愛自体が感情面から価値あるものとして認められてくるのは18世紀頃の啓蒙思想が影響してい

ると考えられている。キリスト教の「神は愛なり」から「愛は神なり」に変わっていくのはこの頃からである⁽²⁴⁾。愛は男女二人が充足するために努力しながら目指す一つの理想の形であると考えられた。しかし、これらの考えは、産業革命の以降の女性の社会的地位の後退のために退けられていくのであった。今日のような愛が男女対等の立場で論じられるようになってきたのは女性の社会進出が進んだことや避妊の技術が進んだことにあり、性が男女間の意思疎通の手段、友愛の手段として見られることになっていった。

1. 2 愛の成因

愛には愛する対象が必ずある。不安のように対象がないような愛は考えにくく、その対象を挙げると、1) 神、2) 母国、故郷、3) 価値や思想、4) 親子、兄弟、5) 友人、6) 異性、同姓、7) 自然、動物などに愛という言葉が用いられる。これに対する説明は恐らく必要でないだろうが、これらを対象とする愛の原因はいくつに分けられるだろうか、特に人間を対象としたときにわれわれの心の動きのどの部分がこれらを求めるのであろうか。愛を説明するのに親しみを上げ、親しみを説明するために愛を挙げて、結果として何も説明しない循環論法に陥る危険性があるが、この危険を冒してもこれらを起こす心の動きを考える必要がある。それが複雑な人間関係を営むわれわれにとって有用であると考えからである。これらの愛の成因を動物にも存在する基本情動に求めても納得できないことは上で述べた。議論のバックグラウンドになることがあっても、意識にのぼらないもので、実際には役に立たないものである。

愛を現象として分類した場合、ロマンティックな愛、遊びの愛、友愛、情熱的な愛、献身的な愛、実利的な愛が取り上げられている⁽²⁵⁾。しかし現象として、愛は説明できるかもしれないが、もっと人間の奥に潜むものはみえてこない。精神分析からの研究もある⁽²⁶⁾が、ルビンは愛情尺度を作成する研究の中で、愛の因子として、独占と熱中、親和と依存、援助の気持ちの因子を抽出した⁽²⁷⁾。これでもって愛の成因を考えてみることは人間の本質から興味ある。

1. 2. 1 独占と熱中

多くの人間はエゴイスティックで自己中心的に思考するところがある。生活の中で獲得してきたものは自分が占有する権利のあることは、人間の社会形態ができて余剰産物が出てきた段階で

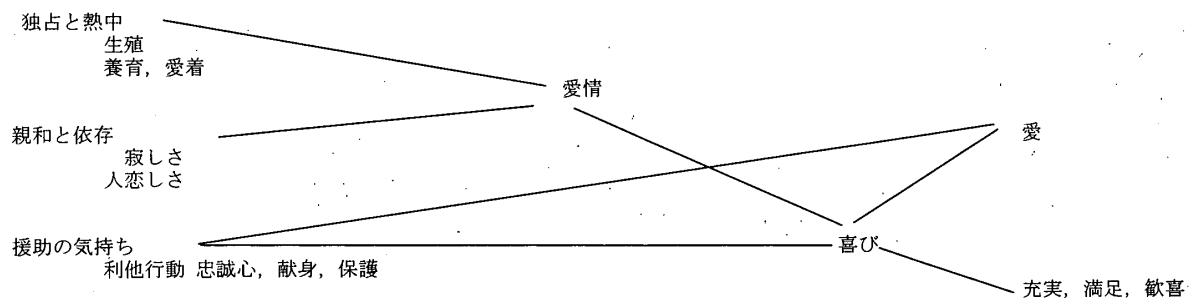


図1. 愛の成因

定着してきた。人間も独占の対象になることは、奴隷という制度が古代に存在していたことで証明されている。この人間の独占欲が愛と愛情の原因であることは、男女の結婚行動で最も顕著に現れる。相手を好きになることは、相手を独占したいと思うことと同等で、相手の気持ちが別の人に目移りせず自分に向いていることを要求する。そして愛情の確認は愛の対象が別人に移らないことを保証する証になる。そこに性行動の作用が入るとしたら、子供は自分の子供でなければならないという保障をそこに与えている。目移りして、誰の子供か分からないようでは男にとって、生涯をかけて子供に投資する価値はないし、女にとって妊娠、育児の期間の安全と生活を保証してくれるものではない⁽²⁸⁾。相互に愛し合うことは、それぞれの視野に制限を加えることであり、独占を保証するものである。

独占は何も男女間だけにあるものではない。友愛や同性愛の中にもその要素は含まれている。

熱中は独占に付属したもので独占を信じさせる手段として存在する。また熱中は価値があると思う対象に対して視野を狭くし、かなりの時間と投資を行わせることになる。そこに物事に対する愛情の片鱗が表れる。動物に対する愛情、車に対する愛情、自然に対する愛情は独占とも異なる、何かに集中し執着することから起こる。これをなくしては物事に対する愛情は起こらないであろう。そういう点で独占は愛情の発生する原因となりうるが、熱中は愛情を持つに至るまでの必要条件になっているのかもしれない。彼女や彼氏に、車や動物に対して視野狭窄になることが熱中であり、特に若いときの愛情行動はこのカテゴリーで説明される。

1. 2. 2 親和と依存

この状態は最も幅広い愛という感情を引き起こす。夫婦を考えた場合、結婚するまでは、上記の独占と熱中であるかもしれないが、子供が育って独立していく過程では、共に生活し、共に人生を送っていくという時間が長くなる。そこには独占や熱中とは異なった愛の形態が存在し、これらが数十年の共に人生を送っていくことを保証しなければならない。夫婦は最も近い話し相手であり、心を通いあわす関係であり、そうしなければ人生の大半の時間を過ごす家庭というものが成り立たないからである。

高齢化社会にあっては高齢者同士の結婚が問題になってきている。高齢者同士の結婚に何を求めているのかを考えたとき、一人では人生を送れない人間の心の動きが見えてくる。誰かと親密に話したい、近くに誰かがいてほしいという欲求が結婚という一つの形態を伴って表れてくると考えられる。円熟した年齢に達したとき、相手を独占したいと思う気持ちも少しはあるかもしれないが、支えあう関係はまさに愛情の根底に人と心を通い会いたいという親和と、共に支えあうという感情があると考えられる。

この親和と依存の機能は広く友人との愛、親子の愛、兄弟愛も応用でき説明となっているように思える。さらには、国と国の関係、地域と地域の関係、組織と組織の間にも適応できる。

恐らくこの親和と依存は人間が一人では生きていけない根本的な性質に依存している。どんな強がりを行っている人でも一人では絶対に生きていけない。誰かと話をし、誰かと挨拶を交わす

日常の中にその人の存在意識が芽生えているのであり、常に人間は他者を求め続ける存在であるということができる。さらに極端にいうならば、自分の周りに雑草でも生き物が存在することが、一つの心の安定を与えることになるのであろう。砂漠をさまよう中で、何かの生命体を見つけることは自分が生きていけることの可能性を与えるものである。

1. 2. 3 援助の気持

上の二つの原因だけで、人間が営む全ての愛と愛情を説明することは難しい。その典型的な例が神への愛や、人類愛、人間愛ではないだろうか。そこには単なる親和とか依存とか、独占、熱中といったものとは異なる心の作用が働いているように思える。前節で人間社会の中で生きていく本性として親和性を取り上げたが、その一環として共に生きていくための相互の助け合いが付随してくるように思える。ゲーム理論からも相互の協力関係はその集団の生き残りの確率を上げることを証明している。それが拡大し、よく言われる「無償の愛」という中に、代償を求めない感情が含まれている。複雑な人間社会の中では多くの行動は自己を中心にした価値判断で行動決定が行われている。こうすれば自分に得であるという選択が無意識の中に多く行われているが、一方では、命を懸けた人命救助を行う性質もある。よくおぼれかけた子供を助けようとして、逆に大人が水死することが見られる。本人はまさか自分が死ぬとは思ってもいなかったであろうが、結果として亡くなることが多く見られる。この行動を考えると、それを愛というかは問題があるにしても、そこには一方の人間の本性としての愛の形があるように思える。

この感情をさらに拡大していけば、そこに人類愛、それを保証するものとしての神へも愛なども発生してくるのではないだろうか。もちろん、宗教であるから別の視点から愛が出てきた可能性もある。それは一つに神秘体験を伴った神への認識である。人は極限の状態によく幻覚、幻聴を経験するという。宗教理論はその方法論を完備している場合が多い⁽²⁹⁾。そのような経験を通して「悟り」なるものを感じ、人間存在のあり方から、広い意味での「愛」を感じるようになるのかもしれない。

2. 憎しみの起源

愛の影として憎しみが存在する。愛がないところに憎しみはなく、反対に憎しみのあるところに愛は育つ。集団生活を営む人間にとって、時には利害関係がこじれ、愛情が憎しみに豹変することがある。愛を持たない人間がいないように、憎しみの心を持たない人間はこの世の中にいない。影は日の光のあるところ、常についてまわる性質のものであり、憎しみは自己の社会的存在を抹殺する力を持つ負の遺産である。人は生きていく上で安心できる生活を営みたいと思うが、そこに負の遺産である憎しみが足音もなく忍び寄ると、その安定した生活が乱れに乱れ、極端になれば生活基盤を失うだけでなく、自己の精神状態をも狂わせてしまうものである。厄介なことに、愛と憎しみの両方を同時に心の中に占めることはできないようである。

心の中にとどまる憎しみは確実に人間の中に生じるものであり、その感情を正確に知り、考え

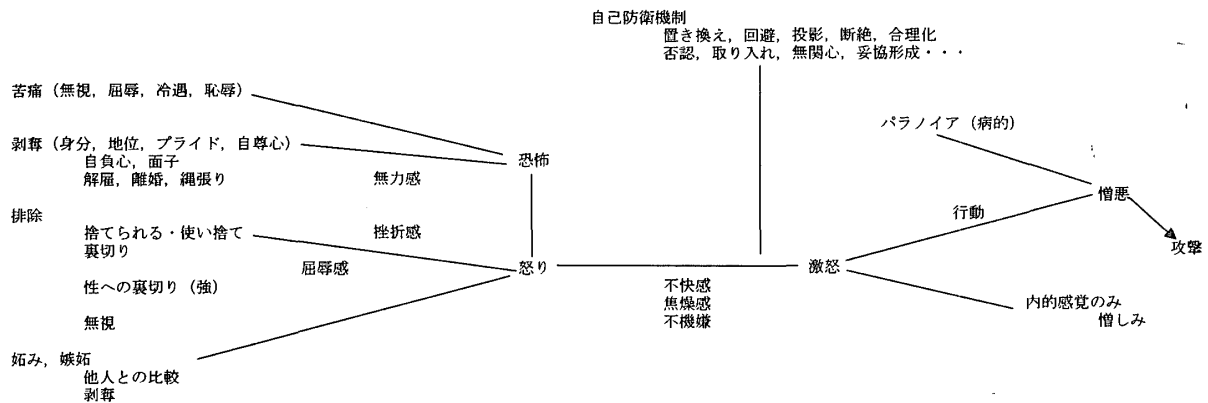


図2. 憎しみの成因

ることによって、人は破壊的な行動から一步下がって物事を対象化することができるかもしれない。一步離れて自分の感情の動き、自分を取り巻く周囲の関係を見渡すことができるならば、負の感情に囚われた状態から抜け出す可能性が出てくる。もっと広く拡大するならば、地球上の戦争をもっと理解できるかもしれない。

憎しみは主観的体験の状態でとどまっている場合と行動上に現れた場合とで言葉の使い方が微妙に異なってくる。憎しみという感情は、幅はあるにしても、心のうちに秘めて表に表れることは少ない。なぜならば、それを表すことは、その人間関係を決定的に損なうことを知っているからである。損なえば、自分が属している社会での自分の存在の喪失をもたらすからである。しかし、憎しみが高じてきた場合、憎悪と呼ばれることが多く、この感情は外へと表されることが多い。直接行動として攻撃的な振る舞いを起こす場合があり、その影響は広範囲に及び人間関係の破綻をもたらすことも多い。

最近、憎しみや憎悪について、憎しみという感情の中にどのような人間の本性が隠れているのかの議論が展開されている^(30~32)。図2は、ゲイリンらの議論を参考にして、憎しみの発生する要因について、過程も含めて系統だてたものである⁽³³⁾。憎しみが発生する要因は大きく分けて、1) 苦痛、2) 剥奪、3) 裏切り、4) 妬み・嫉妬の4点が挙げられる。

2. 1 苦痛

苦痛には身体的苦痛と精神的苦痛の二つに分かれる⁽³⁴⁾。身体的苦痛は通常、身体への侵害刺激からくる痛みを伴い、暴力による痛みはこの中に入る。一般に痛みが身体への危害に関係しており、生命の存続に関係しているために、人間の痛みに対する耐性は弱い。それを利用して拷問や暴力が恐怖を引き起こし昔から刑罰として用いられてきた。身体的な危害を加えられた人は加害者に対して強い憎しみを抱く。なぜなら苦痛は被害者だけが感じ、加害者は何も感じないか、喜びさえ感じる一方通行のものだからである。

身体的苦痛には痛みだけではなく、五感を含めた欠乏感覚も含まれる。欠乏感覚とはある欲求が満たされない場合をさす。その代表例が、空腹感による苦痛であろう。文明化した社会におい

では、空腹による身体的苦痛はほとんど問題にならないが、低開発国では深刻な問題となる。空腹による苦痛は、時に怒りを呼び起こし、さらには持てる者への怒りに転化し、ここに憎しみを起こすことがある。

しかしここで主に対象となる苦痛は精神的苦痛である。これは他人から向けられる非身体的攻撃に伴う心の痛みであり、無視、冷遇、屈辱、恥辱などの攻撃が考えられる。これらを受けた人は、加害者に対して強い憎しみを抱く。無視はその存在を意識しないということで、その人は組織の中でいてもいない幽霊のような存在になる。会社や学校などでその人が数の中に入らないことや、その人と会話するのがはばかれるような状態である。影の存在ともいえない、見えていても見えていないと扱われる状態である。家庭でも今、子供に対して扱われている育て方にネグレクト neglect として話題になっている。子供がいろいろなことを訴えているにもかかわらず、親は何もそちらに関心を向けず子供の養育放棄のような状態である。どんな人であっても、最小限、親から家族の中で自分の存在は認めてもらっている。幼い子供にとって両親が対人関係の全てである世界において、無視されるということはその存在が否定されたということで生存にとって非常に危険なことである。憎しみは相手への共感を麻痺させる傾向がある。一方、会社や学校での無視はその人の生きがいを奪うことになる。人は社会的存在であり、その意味するところはその人が生きている証、理由を社会が認めることである。それが無視されるということは、生きている意味を否定されたことになり、この暴力の結果は悲惨なことになりやすい。この暴力は以下で述べる諸原因の中でも一番根源的で強力なものである。

冷遇は無視と異なって、対象者の存在を認めた上で、対応を第三者と比べて差別的に遇することである。会社の中でよく見られることで、例えば昇進を遅らせるとか、暇な部署に配置換えをするような場合に生じる感覚である。派閥争いや上司とのそりが合わないなどの対人関係の中で生じることが多い。同期の人たちが順当に昇進をしていく中で自分だけが遅れると、自分は冷遇されてお客さんになっているのではないかとの疑いを抱く。そして自分を冷遇している上司なり会社に憎しみを抱くことになる。この場合もこれは心への攻撃であり心の痛みを引き起こしていることになる。

屈辱、恥辱はさらに積極的な対処行動で、本人が持っているプライドや自信に対して積極的に攻撃したり、第三者がいる前で、その存在を否定した場合に生じる感情である。本人がちょっとした失敗を犯した場合などに、大げさにその人の能力を否定する場合などに起こる。身体的欠陥を面前で攻撃された場合にも生じる。この手段は組織の中で、相手を落としたいれようとする場合によく用いられる手段で、多くのサラリーマンが些細なミスにも気を配っている背景にはこのようなことが考えられる。些細な失敗は、本人の責任だけでなく、様々な状況の変化や不可抗力などの原因もあったであろうが、そんなことは関係なく、また考慮せずに本人の能力の問題に帰してしまうことである。

これらの精神的苦痛は、恐れと怒りのいずれかを引き起こし、その結果は相手に対する憎しみを誘発する。無視されることへの恐れ、屈辱されることへの恐れが本人の中にあることは確かである。

ある。もちろんこれらの状態は対象者と行為を行う者との人間関係が重要な要素となる。信頼関係にあるならば、失敗に対する注意は自分の次のステップへと意欲を沸かすことになる。それは本人が状況や人間関係を充分意識した上で判断されることである。

2. 2 剥奪

われわれは生きていく中で、いろいろなものを獲得していく。地位であり、資産であり、名誉だったり、家庭であったり、家族であったりする。生きていく上で必然的に生じるものもあり、また自分の努力の結果生じてきたものもある。もしそのようなものが第三者から剥奪されたとしたら、われわれは何を感じるだろうか。恐らく奪ったものへの憎しみではなかろうか。自分には責任はない。会社が、あの人が私から職をうばったのだと考えるのが普通である。近年、中高年を中心に会社でリストラという人員整理が行われている。その中で転職により機会だと自分から積極的に辞めていった人もいるだろうが、辞めさせられた人も多いと思われる。その人たちは、会社に残りたかったが、無理やりに辞めさせられたと思っているのではないか。その人たちの無力感、挫折感には強いものがあり、そのときにある者は会社や、その中で解雇を言い渡した人に強い憎しみを感じる事が考えられる。人は自分がもっているものを失うことに対して強い不安感なり恐怖を抱く。そして実際に奪われたと感じたときに、そこに怒り、ついで憎しみが生じてくる。

憎しみの対象は通常、職を奪った直接の上司など自分に直接かかわった相手になることが多い。しかし実際の現象は必ずしもそうならない場合がある。精神医学ではパラノイア、妄想型の性質を持つ人は、直接の対象から飛躍して、憎しみの対象が会社や社会全体に向かうことがある⁽³³⁾。はたまた大統領や総理大臣に向かうことがある。このような状態は病的な状態で、憎しみが行動に移されると、社会的損失は計り知れないものがある。憎しみに囚われた脳は他人から見て冷静な働きはしていないことが多く、なぜその人が攻撃の対象になるのか理解に苦しむことも出てくる。

奪われる対象は何も有形な物だけではない。自尊心、面子、プライドなども目に見えないが、本人に所属しているものである。自分に話を通さなかった、自分が知らなかったといって怒る人がいる。こういうのは軽いほうで、他人から罵倒されたことで自分の面子が丸つぶれになったとかで根にもたれるのは重症である。官僚や経済活動の中で「筋を通す」ということなどは、その人の面子を立てる最たるものになる。面子が潰されたといって、他人に詰め腹を切らせるという行為が聞かれるところである。西洋では、プライド、自尊心が重要な要素となる。プライドがけなされて、手袋を下に投げつけて決闘になることも過去にはあった。このようにプライドや面子が失われると、奪った人に対して憎しみを抱く。

離婚などの行為も典型的な剥奪の例と考えられる。離婚裁判や調停過程で夫と妻の間で罵詈雑言が飛び交い取っ組み合いの喧嘩になる場合があるという。何をしてこのような修羅場が生じるのであろうか。そこには剥奪されたことへの挫折感、不快感から生じる憎しみがあると思われる。

今まで二人で築いてきた家庭や信頼関係の崩壊、さらには夫にとっての社会的ステータスの喪失感が奪った人である妻へ、または逆の場合の夫へと向かうのであろう。これは取り戻せないこれまでの生活時間というものがあるために、より強く憎しみとして現れるのかもしれない。

対象をどこまで広げて感じているかは、集団の感情の場合は深刻である。これまでは個人の中の憎しみという感情について議論してきたが、集団についても似たような議論が可能である。国や民族という広い範囲に拡大すると、民族間の対立の原因として、民族間の憎しみが取り上げられることがある^(46, 47)。今世界の中で起っている紛争や戦争は対象の範囲が民族、国家の広い範囲にあり、その中の個人の感情の動きは見えてこないようになっている。特に領土の剥奪や民族の自尊心の無視や批判は紛争の原因になり、憎しみの連鎖反応が起っている。ここで考えなければならないのは、集団の感情の場合、多くの場合、ある個人、ある特定の小さな集団がその感情をおおっている場合があるので、真の問題がどこにあるか冷静に見極めることが必要になる。

2. 3 使い捨て・裏切り

歴史をさかのばれば裏切りは非常に強い憎悪の対象であり、その戒めは悲惨な仕返しで終わることを示している。「勝てば官軍」と言うけれど、江戸時代の徳川家康の大名管理は、この例を示している。豊臣政権から徳川政権に移っていく過程で多くの大名が徳川幕府を作るのに貢献したが、政権ができた後に大名の三分の一以上の領地が消滅、または減封、改易されている⁽³⁵⁾。これにはいろいろな事情はあったにせよ、外様大名は信用できない、いつ裏切られるかもしれないとの意識があったと推定される。徳川幕府を維持するという目的に対して、それを打ち倒す可能性のある外様大名の芽を摘んでおく必要があったと思われる。

このように裏切りに対する恐れ、また裏切ったものへの怒り、憎しみには大きいものがある。その憎しみの大きさを表す表現の一つとして、中国の三国志などに表されている裏切り者への刑罰のおぞましさがある。考えられる限りの残酷さで仕返しをなされている。刑罰の中でも最も重い、また苦しみを与えるものが裏切りへの刑罰であった。首を切る死刑は軽いほうで、罪人を牛にくくり付けて股裂きにする刑や首を木ののこぎりで毎日切っていく刑など書くのをはばかれるものが少なくない。それでも足りなくて墓を暴いて死人に鞭打つことも行われた。なぜ裏切りは斯くも強い憎しみを起こすのだろうか。

裏切りは最も自己の存在を危険にさらされる行為である。自分の縄張りであるテリトリーに自由に入れる者が自分を殺す可能性を握るからである。現代で言えば、自分のあらゆる悪しきこと、弱きことを知っている、または知ることができる者が裏切れば、自分の地位、名誉などあらゆるものが奪われる可能性がある。それゆえ、裏切り者に対する憎しみは強力なものがあるのであろう。

一方、裏切る者の心の動きは、親分から捨てられるかも知れない、使い捨てになるかもしれないという恐れからくるものである。自分の存在が将来否定されるかもしれないということを親分に感じられる場合、その恐れは、自分を認めてくれる第三者に向かうのであろう。あるいは自分

は親分から認めてもらっていないという感覚もそのような感情を持つことに至るのであろう。

身近な社会現象とすれば不倫や浮気による夫婦騒動が例に挙げることができる。単に夫が奪われた、妻が奪われたということだけではなしに、性に関するそれぞれの能力に対する自負心の否定につながるからである。夫の、妻の魅力の否定、夫の、妻の性的能力の否定があり、否定されたことへの怒りが奪ったものへの憎しみに向かうのである。

2. 4 妬み・嫉妬

嫉妬は旧約聖書の2番目に出てくる感情で⁽¹⁹⁾、古くから議論されている⁽³⁶⁾。妬み、嫉妬の定義は「相手が持っているものへの羨望、それを自分が持っていないと感じたときに感じる感情」ということができる。このことは完全に他人との比較の中で起ることを意味する。他者が自分よりも、金持ちであるとか、良い家に住んでいるとか、良い服を着ているとか比較したとき、自分の家が見劣りする、服が見劣りすると感じたとき、相手に対して妬みが起こり嫉妬が起る。もちろんこのように感じない人もいるが、比較する対象によっては、生活の中に必ずといってよいほど一つはあるのではないだろうか。学校時代であれば、成績を比較してなぜそんなに先生からちやほやされるのか、成績がそんなに違わないのになぜ友達からちやほやされるのか、一度ならずとも感じた人はいるであろう。特に社会に出れば競争社会である。全ての人が平等に同じような生活ができるわけでもないし、地位やお金が入ってくるわけでもない。限られたパイの中で競争していく中で、公平な選択ルールが働いているわけではない。そうすると、時には自分より能力の劣った人が選ばれることがあるかもしれない。そんな時、人によっては自分が持てなかったことに対して、相手を妬むことが起る。特に同じような能力や環境にあるものに差別化が起るとそのような感情が起りやすい。

全く離れた存在であれば何も起らない。例えば、自分が研究者でもないのにノーベル賞を貰った人を妬むことがまずないし、スポーツで優勝した人に対しても観客席にいる限りにおいてはそのような感情は起らない。妬みや嫉妬は距離や関係性の関数であり、身近の友人と比較した場合には強く起るようであるが、家族の誰かに対しては起りようがない。

3. まとめ

これまでに人の愛と憎しみに関する起源について議論してきた。愛と憎しみは動物にはない人間究極の感情である。有史以来この二つの感情に対して人はもてあまし気味であった。あるときは真正面から取り上げたかと思えば、キリスト教におけるように男女の愛、性愛は避けて通ろうとした。関心は大いにあるが、まるで乙女心のようにそのことについては無視し、考えないでおこうとして1000年の歳月がたった。しかし、その感情を隠し通すことは不可能で、18世紀に愛は開花しそうになったが、産業革命の問題で片隅に追いやられてしまったようである。そして近年の日本における愛と憎しみの文化がある。これをどう評価し、歴史的な位置づけをするかは分からないが、少なくとも近代の個人主義、人間主義の考えの発展から考えて感情の発露は望ましい

発展と言わなければならないだろう。その中で個人は喜び、また苦しまなければならない。

われわれは感情を進化にしたがって三階層に分けて考えた。最も原始的なものに、快・不快の原始情動、そしてついで受容・愛情、喜び、怒り、恐れ、嫌悪といった動物にも存在する基本情動、最後に人間に最も多様に現れてくる感情に分けた。ここで議論したのは、最も人間的な感情についてであって、さらに最も人間的である愛と憎しみについて、感情を代表させるものとして議論した。したがって動物にも存在するような生殖、養育に伴っている愛や怒り、恐れに関する行動については扱わなかった。そのようなキーワードで説明してもわれわれの生活の中で何の役にもたないと考えたからである。

考えてみると、両者の感情の動きの根底に、文学的に言えば「人間の性（さが）」といえるような、多くの人にとって避けることができないような心の動きが見えてくる。なぜ避けることはできないのであろうか。さらにはこれら心の動きをさらに説明する人間の特性というものがあるのだろうか。

マズローは欲求理論で人間には6層の欲求があると指摘している⁽³⁷⁾。最も根本的なものが生理的欲求で衣食住に伴う欲求である。安全欲求からは怒りや恐れが説明される。ここで議論している愛と憎しみの感情は愛情と所属欲求、尊重欲求、自己実現欲求に関係していることがこれまで述べてきた。愛の親和は所属欲求であり、援助はある面で自己実現欲求の現われとも受け取れる。憎しみの剥奪は所属欲求の現れであり、尊重欲求の現われであるとも考えられる。したがって人間の愛憎は欲求理論によって説明されなくもないが、以前にも議論したように欲求を持ち出せば、人間の本性は欲求から先へは追求できないことになる。

愛には独占と熱中、親和と依存、援助の気持ちがこころの動きとしてあり、それが愛の行動を引き起こす。また憎しみについては、苦痛、剥奪、排除、嫉妬が根本にあると議論してきた。これらの根本は何であろうかと考えたとき、そこに自我の問題が横たわっているように思える。マズローの欲求理論の所属欲求、尊重欲求、自己実現欲求の中に含まれている自分という問題である。

仏教の心理学には面白いものがある⁽³⁸⁾。仏教ではこころの動きを8層に考え、煩惱の根本には自我が深く関係していることを見つけている。第7層のマナ識と言われている無意識の世界で起ることである。我執とも言われる状態で自分に執着するこころの働きである。「自分が」「自分だけが」と心の奥で考えることが意識の世界での愛憎を産み出していると仏教は看破している。憎しみの剥奪や排除、嫉妬はまさしく「私が」というこころの表れであり、愛情の親和と依存も「自分が」という気持ちの現われでもある。感情はその点で根本的に「我」の表現形態かもしれない。これは恐らく動物にはない機能で人間だけが持つ部分であろう。

この「我」を超えたところに愛のもう一つの姿があるのかも知れない。マズローの自己超越欲求や仏教の第8識であるアラヤ識の状態が二つの愛憎を統合するものとして考えられるのかもしれない。

参考文献

1. Cornelius, R.R. The Science of Emotion. Prentice-Hall, 1996 (齋藤勇監訳, 感情の科学, 誠心書房, 1999).
2. Newberg, A., d'Aquili, E. and Rause, V. Why God Wont Go Away. The Ballantine Publishing Group, 2001 (茂木健一郎監訳, 脳はいかにして〈神〉を見るか, PHP研究所, 2003).
3. Clark, W.G. and Grunstein, M. Are We Hardwired? Oxford University Press, New York, 2001 (鈴木光太郎訳, 遺伝子は私たちをどこまで支配しているか, 新曜社, 2003).
4. 遠藤俊彦 喜怒哀楽の起源. 岩波科学ライブラリー41, 1996.
5. Izard, C.E. The Psychology of Emotions. Plenum Press, New York, 1991 (莊巖舜哉訳, 感情心理学, ナカニシヤ出版, 1996).
6. 福田正治 感情を知る ナカニシヤ出版 2003.
7. Lutz, T. Crying, Melanie Jackson Agency, New York, 1999 (別宮, 藤田, 栗山訳, 人はなぜ泣き, なぜ泣きやむのか, 八坂書房, 2003).
8. ベルクソン 笑い (林 達夫訳, 岩波文庫, 1938).
9. Burkert, W. Creation of the Sacred. Harvard University Press, 1996 (松浦俊輔訳, 人はなぜ神をつくりだすのか, 青土社, 1998).
10. Zeki, S. Inner Vision. Oxford University Press, 1999 (河内十郎監訳, 脳は美をいかに感じるか, 日本経済新聞社, 2002).
11. 澤田瑞也, 共感の心理学, 世界思想社, 1992.
12. Delumeau, J. 恐怖の歴史 (永見, 西沢訳), 新評論, 1997.
13. Pagels, E. The Origin of Satan. (松田和也訳, 悪魔の起源, 青土社, 2000).
14. 白川 静 字統. 平凡社, 1984.
15. 藤堂明保, 松本 昭, 竹田晃編, 漢字源. 学習研究社, 1988.
16. 高島元洋, 日本人の感情. ペリかん社, 2000.
17. ひろ さちや 仏教とキリスト教. 新潮選書, 新潮社, 1986.
18. 廣川洋一 古代感情論. 岩波書店, 2000.
19. 旧約聖書 (中沢洽樹訳), 世界の名著12, 中央公論社, 1968.
20. フーコー, M. 性の歴史I, 〈佐藤亮一訳〉, 新潮社, 1986.
21. コリンズ, M., プライス, M.A. キリスト教の歴史 間瀬監修 BL出版
22. Descartes, R. 情念論 (野田又夫訳), 世界の名著22, 中央公論社, 1967.
23. Descartes, R., 書簡集 (野田又夫訳), 世界の名著22, 中央公論社, 1967.
24. Melchior-Bonnet, S. and Tocqueville, A. 不倫の歴史 (橋口久子訳) 原書房 2001.
25. Hendrick, C. and Hendrick, S. A theory and method of love. J. of Personality and Social Psychology, 50: 392-402, 1986.
26. Suttie, L.D. The Origin of Love and Hate, Penguin Books, (國分他訳, 愛憎の起源, 黎明書房, 2000).
27. Rubin, Z. Measurement of romantic love. J. of Personality and Social Psychology, 16: 265-273, 1970.
28. 長谷川真理子 オスの戦略メスの戦略. NHK ライブラリー, 日本放送出版協会, 1999.
29. ダライ・ラマ他者と共に生きる ダライ・ラマ 田崎ら 春秋社 1999.

30. Lama, D., Goldman, D. Destructive Emotions. The Bantam Dell Publishing, 2003 (加藤洋子訳, 破壊的な感情を持つのか, 角川書店, 2003).
31. Masters, B. The Evil that Men do. Transworld Publisher, 1996 (森 英明訳, 人はなぜ悪をなすのか, 草思社, 2000).
32. Dozier, R.W. Why We Hate. McGraw-Hill, 2002 (桃井緑美子訳, 人はなぜ憎むのか, 河出書房新社, 2003).
33. Gaylin W. Hated. PublicAffairs, 2003 (中谷和男訳, 憎悪, アスペクト 2004).
34. Morris, D. The Culture of Pain. Univ. of California Press, 1991 (渡邊 勉, 鈴木牧彦訳, 痛みの文化史, 紀伊国屋書店, 1998).
35. 藤井譲治編 日本の近世③支配のしくみ, 中央公論社, 1991.
36. 萩野恒一 嫉妬の構造. 現代教養文庫, 社会思想社, 1996.
37. Maslow, A. The Further Researches of Human Nature. Viking, New York, 1971.
38. 勝呂信静 講座「仏教思想4」大乘仏教における心理学, 1975.